

実証主義と進化論

自然科学の分野での目覚ましい発展と、さらに産業革命によって技術が進歩したことがあいまって、19世紀には人間の社会を考えると時にも、自然科学的な方法を取り入れようという潮流が生まれた。コントに始まる実証主義である。

自然科学が社会に大きな影響を与えたものとして、進化論がある。19世紀の半ばに、ダーウィンは『種の起源』をあらわし、生物はすべて共通の祖先から枝分かれして進化していったと主張した。またスペンサーは、より環境に適応したものが生き残るという適者生存という概念を社会に応用し、社会を有機体としてとらえた。

これに対し、ベルグソンは、進化を枝分かれさせていくことを推し進める力を、生命の跳躍（エラン・ヴィタール）と呼んだ。そして機械論的自然観が生み出す問題を克服するために、愛の跳躍（エラン・ダムール）に着目し、共同体の内部に閉じこもらない「開かれた社会」の実現を唱えた。

自然との調和

スピノザは、機械論的自然観の問題を克服しようとし、神即自然、「自然の何処にも何にもでも神がいる」という考えかたを提唱した。

このスピノザに影響を受けたドイツの詩人ゲーテは、理性的な存在としての人間と、単なる物質や手段に貶められている自然という分離を批判した。人間とは自然のなかに生き、人間の生命とつながり合っているのだという「生きた自然」という考え方を提唱したのである。

このゲーテに共感し、「生命への畏怖」という思想を打ち立てたのは、神学者、音楽家であり、医師でもあるシュヴァイツァーであり、「自分は生きようとする生命に囲まれた、生きようとする生命である」と考え、すべての生命に愛という畏怖の心を持った。

インドの独立運動の父と呼ばれるガンジーの実践したアヒンサー（不殺生、非暴力）という考えかたも、機械論的自然観の克服の例である。